

聴覚障害児の書記表現と音韻意識の発達に関する一研究

被害の状況表現の違いから

○渡部杏菜

濱田豊彦

(筑波技術大学障害者高等教育研究支援センター) (東京学芸大学教育実践創生講座)

KEY WORDS: 聴覚障害 音韻意識 書記表現

(目的) 日本語の読み書きを習得するには、話しことばの音を理解し、文字との対応規則を習得しなければならない、そのために音韻意識の形成が必要である(高橋, 2017)。音韻意識は、語を構成している音韻の系列を分析し、その音韻の順序的構成および音韻的組成、構成を知る知的な行為、技能の習得によって形成される(1988, 天野)。聴覚障害児は4歳前半頃から6歳後半にかけて音韻分解能力が発達することを示している(近藤・濱田, 2011)。渡部(2021)は聴覚障害児の音韻意識と作文能力との関連を検討し、幼児期に音韻意識の発達が遅れていた群は、文法的誤りが多い作文を書く者が多いことを示した。しかし、そもそも自分で書ける文を書いているため、誤りは多く見られず、音韻意識と作文能力との関連性は具体的には明らかにされていない。我妻(2000)は、作文は自分の感情の強さや微妙なニュアンスを伝えるために様々な表現を駆使する必要がある、聴覚障害児はそれが困難であり、聴覚障害児の作文は淡々とした印象を受けることを指摘している。そこで、本研究では、聴覚障害児の作文における表現方法に着目し、音韻意識との関連性を検討した。被害の状況表現に焦点を当てて分析することとした。

(方法) 検査①「音韻分解課題」: 聴覚特別支援学校の乳幼児教育相談、幼稚部の2歳7月～5歳10月の聴覚障害児35名に約2年間一定間隔をあけ2～6回音韻分解課題を実施した。清音単語4問、特殊音節単語5問を検査材料とし、モーラ単位で分解できれば正答とした。渡部(2021)が聴覚障害児において、4歳後半で音韻分解課題の正答率が60%に達しない場合、小学部2年までの文理解が遅れることを示唆したことから、本研究でも音韻分解課題において4歳後半で正答率60%に達したか否かを基準とし、対象児を分類した。4歳後半までに正答率60%に達した者を「音韻分解正常群」、達しなかった者を「音韻分解不良群」、担任より発達の遅れが指摘される者および言葉の遅れが見られた者は「発達遅滞群」、検査①実施中に4歳半に満たなかった者を「4歳半未満群」とした。音韻分解正常群は11名、音韻分解不良群は6名、発達遅滞群は5名、4歳半未満群は5名であった。検査②「作文課題」: 検査①の対象児が小学部2～4年時に実施した。標準失語症検査(1975)の「まんがの説明」を検査材料とし(図1)、まんがの内容を説明した文を書かせた。書かせた文から2コマ目の「帽子が飛ばされた」場面の表現を抽出し分類した(「ぼうしが○○」「ぼうしを○○」)。動詞前の助詞の誤りは分析対象としなかった。検査①、②の両方のデータが得られた27名を分析対象とした(54～124dB(1名スケールアウト))。検査を実施するにあたり、学校および保護者に文書で了承を得た。文書には得られたデータは研究目的以外には使用せず個人が特定されない形で処理することを明記した。検査①は対象児と十分な関係を築いてから実施し、検査②は

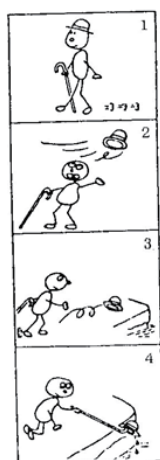


図1 作文課題
検査材料

図示や手話を併用して説明し、対象児が十分に課題の意図を理解してから実施した。検査に抵抗を示した場合は無理には行わなかった。

(結果) 作文課題において対象児に見られた表現を図2の横軸に示し、各表現の人数と音韻意識の習得状況を示した。文が書けなかった場合や誤った表現(例: よびました←とびました)はその他に分類した。対象児全体では「とばされてしまった」と表現した者が一番多かった。音韻意識良好群は2名を除き、被害の状況を「されてしまった」「された」「しまった」という語形変化を用いて表現していた。音韻意識不良群は1名のみ「されてしまった」で表現したが、その他5名は「とばした」「とんでいった」など被害を表す表現はなく、状況の説明に留まった。

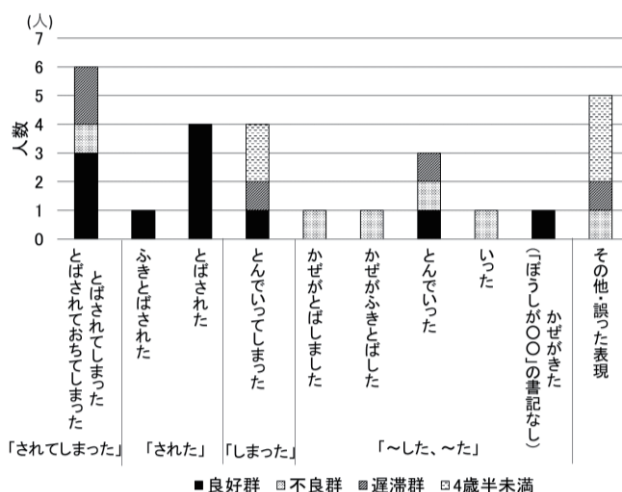


図2 作文における表現方法の人数と音韻分解習得状況

(考察) 幼児期の音韻意識の発達が良好である聴覚障害児は、図から状況を読み取り、被害を表す表現を用いて適切に書記できることが示された。音韻意識の発達の場合、状況に応じた表現への意識も高くなり、複雑な語形変化を分析し使用できるのではないかと考えられた。一方で幼児期の音韻意識の発達が遅れると、状況に応じた表現の習得が難しく、自分の知っている簡単な書記表現に留まると考えられた。左藤・四日市(2004)が聴覚障害児は語のもつ限定的な意味と文脈との関係を一致させていくことが難しく、文脈に関わらず汎用性の高い動詞を産出すると示したことから、聴覚障害児の中には文脈に応じた複雑な表現を習得することが難しい者がおり、その特徴は音韻意識の発達が遅れる者に顕著に表れるのではないかと考えられた。

(文献) 我妻敏博(2000)電子情報通信学会技術研究報告 TL思考と言語.100(480), 47-52. 天野清(1988)教育心理学年報. 27, 142-164. 近藤史野・濱田豊彦(2011)東京学芸大学紀要総合教育科学系Ⅱ, 62, 1-11. 左藤敦子・四日市章(2004)特殊教育学研究, 41(5), 455-464. 失語症研究会(1975)標準失語症検査第1版. 高橋登(2017)講座・臨床発達心理学⑤言語発達とその支援. 秦野悦子・高橋登(編). ミネルヴァ書房, p.147-166. 渡部杏菜(2021)東京学芸大学, 博士論文. (WATANABE Anna, HAMADA Toyohiko)